平成20年9月5日発行（年4回3･6･9･12月5日発行）通巻87号

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日
Children, Our Future

2008年9月 NO.87

バンキアン地区保育所 ©小林正典

目 次

② カンボジア駐在スタッフ報告会
⑤ 先生が歯磨き上手に！ －むし歯予防活動、終了－
⑥「義肢装具士をめざして」 唐沢幸子さん
⑦ －国内活動報告－ 株式会社サハ・ダイヤモンド／名古屋外国語大学
⑧ ～連載寄稿～「青年たち」フォトジャーナリスト 高橋智史さん

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

カンボジア駐在スタッフ報告会

関口晴美（事務所長）& 山極小枝子（保育担当）

「幼い時期に、ちゃんと食べて、
生き抜く力をつけること。
これが、その後の人生に、
大きな意味を持つと思うんです。」

2008年5月24日（土）、カンボジア駐在スタッフの関口・山極による活動報告会を開催し、約50名の参加者を前に、「貧しい地域で保育を行うことの大切さ」をお伝えしました。

関口 -------

みなさま、こんにちは。今日は、プノンペンの貧しい人たちにとって、保育所がどのような役割を果たしているのかについて、ご報告いたします。

プノンペンには今、スラムが700ヶ所ぐらいあると言われています。急速な発展によって貧富の差が広がっています。事務所の前の、以前は空き地だったところに、今は立派な建物が次々にできています。ゲストハウス、レストラン、洋服屋さんと色々なお店が入っていますが、こうして建設ラッシュがどんどん進んでいるんですね。地方からきた家族が、小さなお子さんをそのまま連れて建設現場で生活する姿も良く見かけるようになりました。

ここ最近、カンボジアでは物価が2倍・3倍になって、貧しい人の生活に響いてきています。貧困層の人たちが住む地域は衛生環境も悪いし、子どもたちが放って置かれて危険な状態にあります。その中で保育所の役割は非常に大きいものです。幼い時期は人生の中でとても大切で、やっぱりこの時にちゃんとしたものを食べて、生き抜いていける力をつけることは、その後の人生を送っていくのに非常に大きな意味を持つと思います。

CYRは、子どもたちがお腹いっぱい食べて、安全で楽しく過ごせる場所が緊急に必要ではないかということで、現地NGOに協力して、この貧しい地域で保育の活動を行っています。それでは山極から、昨年この地域で開いた保育所の子どもたちの様子について、ご報告したいと思います。

山極 -------

昨年7月に2つの保育所を開きました。みなさまに、保育所の大切さを実感していただけるために、ビデオを撮ったり写真を撮ったり。何か変化をご報告したいと考えていました。それで、開所して2ヵ月後に、保育所から20人の子どもを選んでもらって、家庭訪問をしました。その時と今とで、子どもたちの変化をお伝えしたいと思います。

このお子さん（右ページ写真）はコムビラー君。3歳で、7人家族です。家庭訪問した時には、お父さんとお母さんは工場で働いていて留守でした。現金収入は月に100ドルくらいです。おじいちゃんの話では、コンビラー君は「保育所に通うようになって病気をすることが少なくなった」そうです。それは、「給食を毎日食べているからじゃないかなぁ」ということでした。9月に保育所へ行って会ってきたのですが、ちょっとの期間でずいぶん様子が変わっていたんです。

右ページ上の写真は家庭訪問に行った時。下はつい最近撮った写真です。

ちゃんと食べる。© 小林正典

コムビラー君

次はクリマーさん、3歳です。1年前に、このお母さんからはすごく悲しいお話を伺いました。食べるものがなくて、6人のお子さんのうち、3人が亡くなったそうです。ここのお宅では、お魚を干して売ったり・・・そんな仕事ですね。なかなか収入が入ってこない。8人の大家族なので、十分に食べていないのじゃないかという気がしました。川の上に作った粗末な家に住んでいて、家賃がいらないそうです。おばあちゃんは、クリマーさんが保育所に通うようになって「挨拶ができるようになった」とか、「歌が歌えるようになった」とか、「果物の名前も覚えたんだ」と、とても喜んでいらっしゃいました。ここのお母さんは、今、保育所で給食を作っています。

クリマーさん

左の上の写真が家庭訪問の時に撮ったお母さんです。以前は表情が無かったんですけれど、今はすごく生き生きと楽しそうに過ごしています。

次はパシラーさん、4歳です。6人家族でやっぱり粗末な家に住んでいます。お母さんの話では、「保育所に通うようになって、話をするようになったし歌も歌えるようになった」「英語も覚えた」と言っていましたけれど、印象的だったのは、「保育所のお休みの日曜は、『行きたい』と言って泣いている」そうです。1年前の訪問の時には、お母さんは元気だったけれど、パシラーさんは次ページ上の写真にあるように元気がなくて、気にかかっていました。でも保育園に通うようになってずいぶん元気になりました。

（次ページへ続く）

外遊び（プノンペンの保育所）© 小林正典

遊んだ後は、しっかりお昼寝 © 小林正典

パシラーさん（真ん中）

子どもが遊ぶ場所もない本当に貧しい地域です。高床式に、ちょっと手を入れてできたような、そんなに立派でもない施設で、先生たちだって、しっかりと教育を受けたような人でもないですが、あの家庭の様子を見ていると、「保育所は天国のようなんだろうな」という感じがするくらいです。子どもたちは、友だちや先生と遊んだり、給食を食べたり、昼寝をしたりして1日を過ごしていますが、この『あたり前のような日々のこと』の意味が、日本とはだいぶ違うような印象で、私は是非この活動を続けていきたいという気がしています。

でも、継続していく、つまり将来はカンボジアの地域の中でカンボジアの人が自分たちで保育所の運営をしていけるようにすることを考えると、非常に難しい壁に当たっています。どんどん保育所を建てたとしても、増えていく度にCYRが毎年抱えていくことを考えると、そうもいかない・・・と頭も抱えているところです。

関口 -------

保育所を運営していくのに、教材や遊具などの環境整備にもお金はかかりますが、1番必要なのは、先生たちの給料なんです。1年間で大体65万円くらいがここにかかります。現地NGOが、支援先を探して運営を続けるのがなかなか難しいので、外国のNGOが手を引いた後、保育所や幼稚園がなくなってしまうことは良くあることです。是非私たちとしては、この保育所を続けていってほしいので、今後も、このパートナーである現地NGOが継続できるように働きかけていきたいです。今日は、ありがとうございました。

先生が『歯磨き上手』に!

～むし歯予防活動、報告～

日本人歯科の先生と協力して行ってきた、保育所での「むし歯予防プロジェクト」が終了しました。2004年から4回に渡ってカンボジアへ出張された、NPOカムカムクメールの沼口麗子先生より報告レポートが届きました。抜粋してお伝えします。

4年前、カンボジアで初めて見た子どもたちのむし歯の多いこと！これには本当に驚きました。原因は、歯の質、ばい菌などが挙げられますが、それ以外にも環境、家族、経済、文化の問題も大いに関与してきます。50年前の日本も同じようにむし歯の洪水でした。それでも今は、3歳児に2本以下のむし歯が平均です。この間、日本では歯科医を増やし、粉ミルクのショ糖を乳糖に変え、3歳児検診だけでなく、1.5歳児検診を始めるなど、国を挙げて様々な政策が行われました。そしてNHKでは、番組「おかあさんと一緒」で「は・み・が・き じょうずかな～」のコーナーを作りました。

カンボジアには保健専門家が少なく、国の政策も十分ではありません。でも、全国的なヘルスプロモーション活動が展開できれば、カンボジアでも20年以下でむし歯を減らせるのでは・・？！と思っているところです。

2つの保育所では、2004年から4回に渡って検診を行いました。最後の検診結果では、1人の平均むし歯数は8.24本。数は4年前とほとんど変わりませんでしたが、保育所の環境はずいぶん変わりました。

ソクチアボランティアチームによる治療

何よりも、先生が自分自身にも子どもにも『歯磨き上手』になりました。出会った頃はぎこちない歯磨きでしたが、今はシャカシャカと大変上手です。先生たちの口の中は、ずいぶん綺麗になりました。口の中を気遣ってくれる大人が身近にいることは、子どものむし歯予防につながります。その他、歯ブラシの保管場所が布袋から木枠に変わったり、買い食いを禁止したり、むし歯の絵本を読み聞かせするなどの成果がありました。

もう1つ、大きな成果があったのは、カンボジア人からカンボジア人へと知識や技術の伝達ができたことです。後半の第3、4回目の活動は、カンボジア人医師と医学生による「ソクチアボランティアチーム」が治療や検診を担当しました。メンバーは、子どもたちに優しく接しながら、保護者へも時間をかけて丁寧にアドバイスをしていました。今後の課題は、保育所の外！つまり家庭でも歯磨きを普及できるようにすることです。

今回で日本からの派遣は終了しますが、これから先は、このソクチアボランティアチームが保護者への啓蒙教育を継続していってほしいと願っています。

義肢装具士をめざして

唐沢　幸子 さん

わたしは、現在プノンペンにある義肢装具士学校で勉強しており、ときどきCYRカンボジア事務所で布裁断などのお手伝いを楽しませていただいています。義肢装具士を目指したきっかけは、10年ほど前に地雷の被害についての話を聞いたことです。人を殺すというよりむしろケガをさせ、一生、障がいを抱えて生きさせることで、個人にも社会にも負担を与えようとする、対人地雷の卑劣さに激しい憤りを感じました。大人もですが、地雷を踏んでしまった子どもはどんな気持ちになるだろう、学校や就職はどうなるんだろうと、いたたまれない気持ちでした。

わたしは子どもが好きで、大学では母子保健学を専攻し、保母資格も取りました。保母として就職はできませんでしたが、20代から無認可保育所の運営にも関わり、ずっと「子どもは未来だ」と思っています。10数年前からアジアの子どもたちにささやかな奨学金を送ってきたのですが、地雷の話を聞いてから、わたし自身が子どもたちのそばに行って何かしたいと、考え始めました。結局、いい義足を作って少しでも地雷サバイバーの応援をしたいと思い、義肢装具士になることを決意しました。

日本の義肢装具士学校の受験をしていたときに、プノンペンの学校を紹介され、2005年に入学しました。この学校は3年制で、義肢と装具について理論と実際を学びます。先進国で使っているような高価な材料・部品は使わない、実習が多く卒業後には即戦力になれるというのが、日本の学校とは大きく違う点です。現在、カンボジアのほか、北朝鮮、イラク、インドネシア、東チモール、パプア・ニューギニア、フィリピンなど、いろいろな国の学生が学んでいます。文化、宗教、考え方の違う人たちとの生活は、衝突も楽しいこともたくさん。50歳を過ぎての肉体労働は容易ではありませんが、なんとか元気で卒業し、将来はクラスメートたちの国へ義足作りに行くことを楽しみにしています。

CYRとの出会いは？

わたしがCYRと出会ったのは2002年。かつての勤務先の学生たちが主催したチャリティーコンサートの会場でした。休憩時間に、草木染めの小物や保育所での給食のチラシが置かれたコーナーに立ち寄り、コースターを買いました。その後カレンダーを送っていただくようになり、2005年に会員になりました。

国内活動

－ありがとうございます－

CYRカンボジアの活動は、さまざまな日本での協力に支えられています。

企業

『HAPPY Smileプロジェクト』

株式会社サハダイヤモンド
プリンセスガールズ店長
竹達　雅代　さん

フリーペーパー Happy Smile News

アクセサリーの通販ショップ「Princess Girls」では、08年5月より、「HAPPY Smile プロジェクト」というチャリティ商品の販売をスタートいたしました。

もっと気軽にチャリティ活動に参加していただきたいという願いのもとに、ミサンガを1本購入すると、CYRを通じてカンボジアの子どもたちに10食の食事が届けられるという分かりやすい内容にしました。さらに、多くの方に参加していただけるように販売価格も777円におさえたことから、ちょっとしたプレゼントや何本かをまとめてお買い求めいただくなど、ご好評をいただいています。

お客様の声として多いのが、本当に食事が届けられているのかといった疑問です。それらを解消するため、フリーペーパーやコミュニティサイト（http://www.pghs.jp）で活動内容をご報告しています。秋には、私自身もカンボジアへ渡り、現地の模様をお客様へお伝えしたいと思っています。

アクセサリーで着飾るのは素敵なことです。でも、世界には日々の食事さえ満足にできない人もいます。このプロジェクトを機に、自分のために何かをしたら、他の誰かのためにも“ちょっとイイことをする”、そんな習慣を発信し続けていきたいと思います。

学校

『授業でプチボランティア』

名古屋外国語大学
宮川　公平　先生

カンボジアの子どもに喜んでもらえたら嬉しいな！

この活動を、日本の子どもに教えたい。

こんな自分にも、できることがあった！

みんなで布チョッキン体験中

7月4日、本学の専門科目ボランティア演習の一環で、CYRの協力を得て「みんなで布チョッキン」を開催しました。通常の授業時間内ということもあり、演習以外の学生参加は期待できないと思っていましたが、留学生や隣接する学芸大学からの学生も含め44名の参加がありました。

4人1組のグループで、人形1体の作成を目標にしました。人形に着せる洋服用の生地を選び、型紙に合わせて布を切っていくという単純な作業にも関わらず、学生たちは大変盛り上がっていました。ワークショップ後のアンケートからは、学生にとってボランティア活動が身近に感じられるよい機会となったことが感じられました。

本学では、近年のボランティアへの関心の高まりを反映して、ボランティア体験の場を提供するプログラムを実施するようになってきました。今回のワークショップを一過性のもので終わらせることなく、学生にとって「当たり前」のものになるよう、引き続き授業等で体験の場をもうけていきたいと思います。

※みんなで布チョッキンとは？
カンボジアの子どもたちのために、ボールと人形をつくる活動

仕事中のソティさん。

「希望」

フォトジャーナリスト　高橋 智史　さん

「今、私は幸せです。生まれ変わった人生のようです。目の見えない私が人々に信用されたのですから」。ウン・ソティーさん（32）は穏やかに話してくれた。

ソティさんは13年のキャリアを持つプロのマッサージ師。カンボジアの視覚障害を抱える人々が、マッサージ師として活動しているマッサージ店「シーイングハンズ」で働いている。彼らの確かな技術と真摯な姿勢が評判となり、今は在住外国人やカンボジア女性から多くの支持を得ている。ソティさんには常連のお客さんが何人もつき、いつも予約が入っている。「カンボジアではマッサージと聞くと如何わしい店を想像する人が多い。私たちシーイングハンズのスタッフは目が見えない。もしかしたらその点が、女性のお客さんにも安心感を与えているのかもしれません」と話す。

ソティさんが視力を失ったのはポル・ポト政権末期の1978年。2歳の時だった。栄養不足と病気が原因だと母親から後に知らされた。「物心がつく年齢になると、私の心は絶望感でいっぱいでした。何をするにも家族の助けが必要だったからです。このまま一生仕事もできず、私の人生は終わりをむかえると思っていました」。

ソティさんが絶望に暮れていた 1995 年、転機が訪れた。欧米の NGO が行い始めたカンボジアの視覚障害者の自立支援活動を知ったのだ。ソティさんは人生を変えたいという強い思いで NGO の行っている活動に飛び込んでいった。点字、英語、マッサージ技術を一心不乱に学んだ。自分と同じ境遇にあるカンボジア人の仲間と出会えたのも貴重な経験となった。2005 年には沖縄を訪問する機会に恵まれ、半年間の滞在で日本のマッサージ師から新たな知識と技術を学ぶこともできた。「希望を持つこと。それがどれだけ大切な事か、今の私には分かります。家族の助けがないと何も出来なかった私が、今は家族を助けることができるのです」。そう話すソティさんの向上心は尽きることがない。

「今日はありがとう」。最後に日本語で答えてくれたソティさん。これからは日本語も話せるように勉強したいと笑顔で話してくれた。

●高橋智史さん、プロフィール●

フォトジャーナリスト。1981 年 10 月 6 日生まれ、秋田県秋田市出身。高校卒業後、日本外国語専門学校国際ボランティア学科入学。その後、日大芸術学部写真学科で写真を学んだ。カンボジアを主に東ティモール、アフガニスタン、スマトラ沖地震津波被災地などのアジアの問題、人々の営みを取材し雑誌、写真展などを通じて作品を発表。昨春、カンボジアのプノンペンに移り住み、取材活動を続けている。秋田魁新報社「素顔のカンボジア」でフォト＆ストーリーを連載中。

ＣＹＲの活動をご支援ください

年会費　　正会員 ￥10,000　学生会員 ￥3,000　団体会員 ￥30,000

下記の口座にご送金ください。
郵便局　　No.00110-8-36227（特活）幼い難民を考える会　　銀行　三菱東京 UFJ 銀行六本木支店（普）No.1351747
特定非営利活動法人　幼い難民を考える会

※CYRは認定 NPO 法人です。5,000 円を超えるご寄付は寄付金控除の対象となります。

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒 106-0046 東京都港区元麻布 3-2-20 丸統麻布ビル 2F
TEL：03-3796-6377　FAX：03-3796-6399
Email：info@cyr.or.jp
URL：http://www.cyr.or.jp

子どもたちの明日 87 号
◆発行日 :2008 年 9 月 5 日
◆発行人 : 深水正勝